

# 明治期における「倫理書籍」の出版動向と 「日本倫理」論の類型

え じ ま な お と し  
江 島 尚 俊

## 〈要 旨〉

本稿の目的は、明治期に出版された倫理および倫理学に関連する書籍の量的調査をもとに、当時の出版動向および書籍内容について論じていくことである。この目的を叶えるために、まずは国会図書館デジタルコレクション(調査当時は近代デジタルライブラリー)の格納データをもとに、書誌情報および目次情報のリスト作成を行った。そのリストをベースに、明治期の出版動向を図化すると、明治30年代前半に大きなピークを迎えていることが判明した。そこで、それら書籍を「訳書」「地域」「宗教」「教科書」の4分類で分別し、それぞれの内実を調査した。そして最後に「日本倫理」という概念に着目し、その方法(語り方)には「儒学史的叙述」、「日本史的叙述」、「考証学的叙述」の3類型がみられることを明らかにした。

## 〈キーワード〉

明治期、倫理関連書籍、出版、日本倫理

## はじめに

本稿においては、明治期に出版された倫理および倫理学に関連する書籍(以下、「倫理書籍」)の量的調査をもとに、当時の出版動向および書籍内容について分類し考察することを目的としている。

現在、筆者は、日本における倫理学の歴史(日本倫理学史)に関心をもって研究を進めている。前稿では、日本倫理学史の一端を明らかにすべく大学に焦点を当て、明治9～14年における東京大学(前史を含む)での講義科目「ethics」に関する教育実態を明らかにした<sup>1)</sup>。そこでの概要は以下のとおりである。

幕末から明治最初期において輸入された「ethics」は、当初「修身学」「道義学」などと訳される一方で、それが如何なる概念なのか統一的な理解を得てはいなかった。また、科目「ethics」

を担当した教員たちは現在でいうところの倫理学を正面から扱ってはならず、史学や心理学といった内容を教授していた。そのようななか、井上哲次郎著『倫理新説』が刊行される。井上は「ethics」を、倫理探究の学問ではなく倫理学を探究するための学問と定義した。井上がそのような定義を行った背景には、井上自身の問題関心(西洋的な倫理学ではなく東洋的な倫理学を構築したいという反オリエンタリズム的な関心)があった。この意味において、倫理思想史のみならず倫理学史上においても井上の役割は大きかったことを、子安宣邦の主張を踏まえながら前稿では論じた。

さて、上記の成果を受けて本稿で着目したいのが、その後の倫理学である。井上が提唱した倫理学がその後どのような展開を見せていったのか。それを明治期に出版された「倫理書籍」の量的調査に基づき明らかにしていきたいと考えている。無論、前稿に続いて大学に焦点をあてる必要性についても十分理解している。ただし、日本倫理学史上において極めて大きな影響を与えた教育勅語(明治23年渙発)とその社会的影響力を考慮すると、大学を焦点化するだけでは当時の倫理学を再考していくには不十分である。ゆえに、本稿では倫理学をとりまく社会性や時代性に関心を寄せていく。如何なる倫理学が明治日本社会に流布していたのかを明らかにすべく、今回は「倫理書籍」に着眼していきたいと考えている。なお、前稿において既に指摘したことであるが、近代日本における倫理学を歴史的観点から捉える研究は、未だ数える程度しか存在していない<sup>2)</sup>。上述したように前稿では大学という視点から倫理学史を論じたが、本稿では「倫理書籍」に着目して論じていく。明治期における倫理学が、どのような書籍と内容をもって流布していったのか、本稿ではその点に着目していきたい。

## I. 調査方法の概要

本章では、「倫理書籍」に関して行った量的調査の方法について説明する。

近代日本における「倫理書籍」のデータベースを作成するにあたって利用したのが、国立国会図書館近代デジタルライブラリーである(なお、このライブラリーは平成28年6月1日をもって、同図書館のデジタルコレクション<sup>3)</sup>という新しいサービスへ統合されている)。このライブラリーの活用を決めた理由としては、利便性と格納冊数の多さが挙げられる。一般的な図書館のOPACと異なり、同ライブラリーの検索サイトは検索結果を一括ダウンロード可能であり、リスト作成作業の負担を大幅に軽減してくれる。また、倫理関連の図書、特に戦前期という古い図書になると最も多く収納していたのは国立国会図書館であった<sup>4)</sup>。以上の理由をもって、同ライブラリーのサービスを活用することにした。

「倫理書籍」のリスト化作業に着手したのは平成28年1月12日である。その当時のサービス名称は、近代デジタルライブラリーであった。そのサービスを利用し、検索画面において「倫理」と

いう語をキーワード検索した結果、ライブラリー内で公開されていた書籍は653冊(同名・同執筆者による書籍の重複を含む)が表示された。この内、正確な刊行年が判明したのは584冊であり、最も早い刊行は明治7(1874)年、最も遅い刊行は昭和23(1948)年であった。さて、この653冊を基本資料とすべく、書籍情報のリスト作成と目次情報のリスト作成の2つの作業を行った。リスト化に用いたソフトウェアはマイクロソフト社のExcel2010である(図1)。

最初に行ったのは、書誌情報のリスト作成である。このリストでは、著者、書名、監修・訳、出版社、出版年、出版月、出版日、シリーズ名、の項目を立て、それらの精査と整理を行った。明らかに誤植や間違いと確認できるものは手作業で修正を行い、正確なリスト作成を目指した。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
	id	書名	著者	【監修・訳 など】	出版社	出版年	西暦	出版月	出版日	シリーズ名
1	1	倫理学	大西祝述		東京専門学校	[ ]	?			東京専門学校文教科 第3回第3年級選修
2	2	倫理学初歩	チャネー 著[他]		金港堂	[ ]	1891			普通教育 2
3	3	倫理哲学	ジー・ティー・ラッド 著	中島力造 関・大島 直治訳	大日本図 書	[ ]	?			
4	4	倫理学書解説	中島徳蔵解説	チューイー 氏倫理学 摘要	育成会	1900	1900	5	12	続倫理学書解説 第 3
5	4	倫理学書解説	鍋島栄一郎解説	スチーブ ン氏倫理 学	育成会	1900	1900	6	27	続倫理学書解説 第 3
6	5	倫理学 [1]	和辻哲郎 著		【和辻哲 郎】	【製作年 不明】	?			
7	6	仏教倫理思想史 [4]	和辻哲郎 著		【和辻哲 郎】	【製作年 不明】	?			
8					【和辻哲 郎】	【製作年 不明】				

図1 「倫理書籍」の書誌情報リスト

次に行ったのが、目次情報のリスト作成である。653冊の対象書籍の内、527冊については目次データがすでにライブラリー内で公開されていたため、それらをエクセルファイル内に手作業でコピー&ペーストを行った。目次データが公開されていなかった126冊については、それぞれの中身を逐次確認する作業を行った。当該書籍内に目次ページが掲載されていれば、それをエクセルへ入力し、目次ページの掲載がなければ、1ページ毎に閲覧し、目次にあたるものがあればそれを入力した。

上記の作業を経て653冊分の書誌情報リストおよび目次情報リストを完成させ、この両者を本稿における基本資料と定めた。なお、本稿では明治期を考察対象と設定しているため、明治45年以前に発刊されていたことを確認できた321冊を対象とした。

## Ⅱ. 明治期における「倫理書籍」の出版動向

前章で述べた書誌情報のリスト化作業を経て、明治期(1868～1912年)に刊行された「倫理書籍」を絞り込んでみると、その総計は321冊であった<sup>5)</sup>。そこで、この321冊を出版年(西暦)毎にグラフ化したのが下記の図2である。

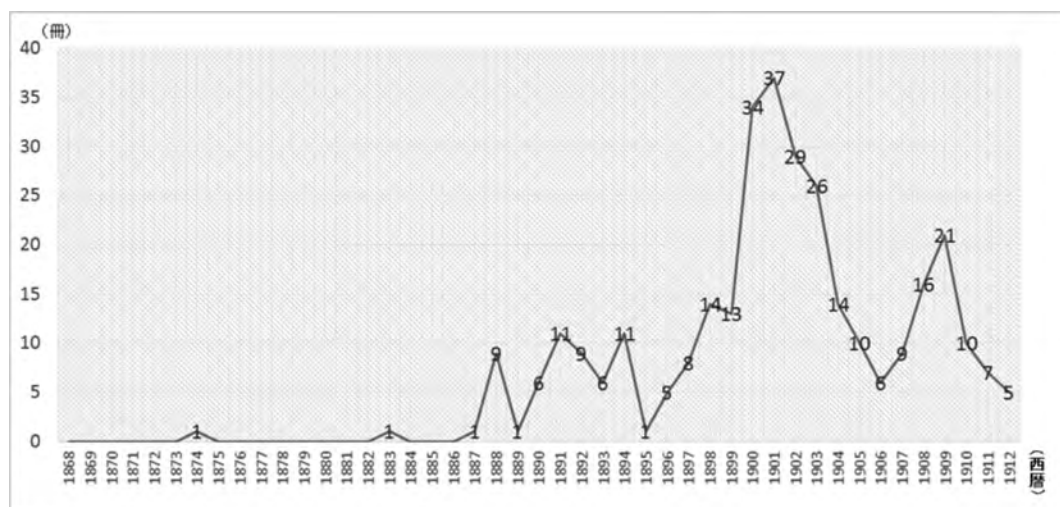


図2 明治年間における「倫理書籍」発行冊数

明治期の「倫理書籍」のなかで最も早い刊行書籍は、河村重秀編『倫理略説』(明六舎, 1874)であった。編者の河村(1823-1884)は、儒学者として福山藩誠之館の改革に関与した人物である。『倫理略説』以前には、『明倫撮要』(1871)を著している<sup>7)</sup>。『明倫撮要』での目次は、「君臣の義を明かす」、「夫婦之别を明かす」、「長幼之序を明かす」などで構成されている。また、巻末には「六論衍義大意迪■篇等ノ分ヲ取舍抄出スルトコロ也」<sup>8)</sup>(■は判別不能文字)と記載されていた。これらのことから分かるように、当該書籍は江戸期以来の儒学思想(特に朱子学)に基づいた内容となっている。なお、『明倫撮要』はその当時の小学校で実際に用いられていたという報告もある<sup>9)</sup>。同じ河村の手による『倫理略説』も、儒学の立場を鮮明にした内容となっている。それとともに、後に日本へ紹介されていく西洋倫理学の内容を全く含んでいないことは指摘しておきたい。『倫理略説』でいう「倫理」という語は、儒学を基盤とした思想体系のなかで用いられているのであった。なお、その9年後(明治16年)には井上哲次郎によって、西洋倫理学を意識した『倫理新説』が刊行されている。

さて、図2をみてみると、明治20(1887)年以降になって「倫理書籍」が本格的に刊行されていったことが分かる。その後、明治30年代前半(1900年前後)に最も大きなピークがある。

ここで表1を御覧いただきたい。明治期の「倫理書籍」の特徴を析出すべく、筆者は書名(副題を含む)や著者・訳者を判断材料に、「訳書」、「地域(日本、東洋<sup>10)</sup>、西洋、複合<sup>11)</sup>」、「宗教(仏

教, キリスト教, 宗教<sup>12)</sup>」, 「教科書」という, 大きくは計 4 分類(小さくは計 9 分類)を設定した。それに基づき分類した結果が表 1 である<sup>13)</sup>。

表 1 明治期の「倫理書籍」を対象にした分類結果

訳書	地域				宗教			教科書
	日本	東洋	西洋	複合	仏教	キリスト教	宗教	
68	31	12	7	4	11	3	7	40

(単位: 冊)

無論、上記の分類に含まれない書籍も多数存在した。表 1 内に分類できたのは 321 冊中 183 冊であった。以下では、表 1 をもとにしながら分類ごとに考察を行っていく。

最初に「訳書」について触れておきたい。明治 20 年代以降の「訳書」の出版動向として、特定の時期に特定の思想や人物が大々的に取り上げられた、といった動向を見出すことはできなかった。毎年、定期的に一定数の刊行が見られ、種々の人物の倫理学説が出版されていた。本稿では「訳書」68 冊の詳述は省くが、アリストテレス、カント、スペンサー、ミュアヘッド、デューイなど、欧米でも著名な著作が翻訳されていた。なお、これらの書物の目次を通覧していると 1 つの特徴に気づかされる。それは、近代的個人とは何かという問いが共有されている点である。善悪基準や認識の根幹が個人の理性に基づくことを前提とする内容がほぼすべての訳書に共通してみられた<sup>14)</sup>。なお、日本主義が台頭してくる明治 20 年代なかば以降においても、これら訳書には西洋倫理学以外の内容を見ることは無かった。つまり、純粋に西洋倫理学の紹介・導入を目的として書籍刊行がなされていたと考えられる。

次に、「地域」について述べる。地域で最も多いのが「日本」の語を含む「倫理書籍」であった。その端緒を飾っているのが、井上円了による著作『日本倫理学案』(明治 26 年)であり、それ以降、「日本倫理」を冠する書籍は 30 冊刊行されている(これに関しては次章で詳述)。「東洋」の語を含む書籍においては、全て儒教に関する内容や系譜が記述されていた。ゆえに「東洋」とは言いつつも、地域的には現在の中国のみを対象としており、他の東洋地域(アラブ、インド、東南アジアなど)は叙述対象とされていなかった。「西洋」については、古代ギリシャから近代に至る倫理思想が取り上げられていた。ただし、そこでは抽象概念化された「西洋」を前提にした記述はほとんど行われておらず、「西洋」地域における特定の人物(アリストテレスやカントなど)に焦点を当て、その人物が有している倫理思想が平易な文体で紹介されていた。その意味で、訳書と同様の刊行目的であったことが推察される。

次に、「宗教」について触れていく。特定宗教名としては、「仏教」と「キリスト教」の 2 つのみが書名に含まれていた。それらを通読してみると、当然のことながら両者が示す「倫理」的な内容や根拠には多くの相違点が見られた。しかし、共通していたのが、「倫理」なるものを語ろうとする際の方法論的前提である。具体的に言うと、そこで語られている「倫理」とは諸宗教を越えて人類

全体に通じるような「倫理」が前提とされており、その「倫理」に対して個々の宗教教義が如何にアプローチできるかという論法が両者に共通していた。宗教学的に考えると、このような論法は世俗化された「倫理」を前提とした語りの典型と言える。任意の宗教教義や世界観を最も普遍性のあるものと設定し、それに基づき「倫理」が語られるのでは無く、「倫理」なるものがそもそも宗教とは独立して存在し、その「倫理」に対し各々の宗教がどのように貢献できるか、という方法論的前提が両者に共通して見られたのである。平たく言えば、そこでは「倫理」を語る道具として「仏教」や「キリスト教」が位置づけられているのであった。ただし、後に述べるように、このような前提で語られる「倫理」も、ゆくゆくは教育勅語を語るための方法的道具に位置づけられていくこととなる。

本章最後になるが、「教科書」について述べておきたい。図2をみると、最初に山場を迎えるのは明治20年代初頭である。この時期の刊行に特徴的なのは、教科書が多く目立つことである。この時期に刊行された「倫理書籍」の教科書を一覧にしたのが表2である。

表2 明治20代前半の倫理関連教科書

編著名	書名	出版	刊行年
文部省編	『中学校師範学校倫理教科書』		1888
文部省編	『倫理書：中学校・師範学校教科用書』		1888
渋江保(幸福散史)著	『小倫理書：初等教育』		1891
元良勇次郎著	『倫理問題教授法』	金港堂	1891
岡田良平著	『倫理学教科書：中等教育、卷之1, 2』	内田老鶴圃	1890
岡田良平著	『倫理学教科書：中等教育、卷之3, 4』	内田老鶴圃	1890
岡田良平編述	『倫理学教科書：中等教育、卷之1』	内田老鶴圃	1891
岡田良平編述	『倫理学教科書：中等教育、卷之2』	内田老鶴圃	1891
牧野吉弥編	『西洋倫理科試験問題答案』	長嶋燕三郎	1891
篠田正作著[他]	『受験予備倫理学問答』	篠田正作	1891
吉見経綸編	『受験応用倫理学問答』	積善館	1892
駒崎林三編	『倫理問答七百題』	頤才新誌社	1892
岡田良平編述	『倫理学教科書：中等教育、卷之3』	内田老鶴圃	1892
岡田良平編述	『倫理学教科書：中等教育、卷之4』	内田老鶴圃	1892
日下部三之介述	『倫理学百問百答』	長島文昌堂	1893
中原貞七著	『倫理書：中等教育』	文学社	1893

上記の表2に掲げたような書籍群が刊行された背景には、森有礼による教育制度改革があったことは間違いないであろう。近代教育制度の骨格を構築したと評される森の諸学校令についてここでは詳述しないが、森には当時から「国体教育主義」<sup>15)</sup>という指摘があるほど、国家を大前提とした教育観を有していた。彼は制度のみならず、教科や教育内容にまで踏み込んだ改革を企図していた(ただし、森は明治23年に改革半ばにして暗殺される)。それら改革の余波が「倫理書籍」の刊行にも如実に反映したのではないかと筆者は考えている。

ただし、この当時の「倫理書籍」教科書には、「国体教育主義」はそれほど投影されていなかった模様である。たとえば、明治21年(1888)に文部省によって編纂された『中学校師範学校倫理教科書』の目次を見てみると、

## 第一章 概論

## 第二章 目的

## 第三章 行為ノ起原(体欲, 欲望, 情緒, 連想, 習慣)

## 第四章 意志(意志ノ解, 無意ノ作用, 意志ノ他ノ能力ニ対スル関係, 意志ノ正用, 意志ノ自由)

## 第五章 行為ノ標準(標準ノ解, 自他ノ併立, 社会的見解, 道理的見解, 感情的見解)

となっている。当該書は、「国体教育主義」というよりも、自主・自立を志向する個人形成を如何にして成し得るかという観点から「倫理」を論じている。社会や国家について触れられている部分もあるが、それはあくまで従と言える。当該書の主たる内容は、近代的個人の確立に関する記述であり、それが大半を占めていた。つまり、社会や国家はそれら個人の集合体として想定されているのである。

表2に掲げた他の書籍においても、『中学校師範学校倫理教科書』とほぼ同様の論法を採用しているが、そのなかでも中原貞七『倫理書：中等教育』は、国家の絶対性を相対化する視点から「倫理」を語っている点が興味深い。中原は、「倫理道德ニ関スル理論、斯ノ如ク夫レ多岐」であるため、「真理一ノミトノ格言ハ此(倫理道德)ニ適用」(カッコ内は筆者補足)してはならない、という立場を表明している<sup>16)</sup>。日本という国家を絶対視した「倫理」の構築は、忌避されるべき態度とされているのであった。

さて、図2に戻る。このグラフにおける最大のピークは、明治30年代前半(1900年前後)の時期である。明治30年代といえば、旧学制下における中等教育を考える上では非常に重要な時期である。米田俊彦によると、日本の中学校制度が一応の完成を見たのが明治33年前後である<sup>17)</sup>。明治32年に公布された中学校令改正、それに付随する諸法令によって、複線型中等教育制度のなかでも、他の中等教育機関を抑えて中学校が特権的地位を占めることとなった。さらに、明治35年に「中学校教授要目」が制定されることによって、中学校は高等教育機関への接続的な地位にあることを明確化された。これは、上位の教育機関への進学を中学校こそが担うという役割が付与されたことを意味し、中学校は進学を前提とした教育実践を担う機関として、より強く期待されることとなったのである。このような状況変化のなかで、文部省は「尋常中学校倫理科教授細目」(明治31年)も新たに設定している。そこでは、「倫理科」をその他科目の中枢に位置づけた上で教育勅語を遵奉せしめることを求めている<sup>18)</sup>。このような状況変化が、「倫理書籍」にも大きな影響を与えたものと考えられる。

明治30年代前半期において刊行された「倫理書籍」の教科書を一覧にしたのが表3である。

表3 明治30年代前半の倫理関連教科書

編著名	書名	出版	刊行年
井上哲次郎, 高山林次郎 著	『新編倫理教科書 首巻』	金港堂	1897
井上哲次郎, 高山林次郎 著	『新編倫理教科書 巻1』	金港堂	1897
井上哲次郎, 高山林次郎 著	『新編倫理教科書 巻2』	金港堂	1897
井上哲次郎, 高山林次郎 著	『新編倫理教科書 巻3』	金港堂	1897
井上哲次郎, 高山林次郎 著	『新編倫理教科書 巻4』	金港堂	1897
井上哲次郎, 高山林次郎 著	『倫理教科書 総説』	金港堂	1898
井上哲次郎, 高山林次郎 著	『倫理教科書 巻上』	金港堂	1898
井上円了 著	『中等倫理書 巻之1・3』	集英堂	1898
井上哲次郎, 高山林次郎 著	『倫理教科書 巻下』	金港堂	1898
井上円了 著	『中等倫理書 巻之4・5』	集英堂	1898
岡本監輔 評	『論語正本：倫理教科』	三木書店	1899
斎藤清之丞 編	『孝経採要：倫理教科』	金華堂	1899
秋山四郎 著	『中学倫理書 上』	金港堂	1899
秋山四郎 著	『中学倫理書 中』	金港堂	1899
秋山四郎 著	『中学倫理書 下』	金港堂	1899
元良勇次郎 著	『倫理講話：中等教育 前編』	右文館	1900
元良勇次郎 著	『倫理講話：中等教育 後編』	右文館	1900
平沢金之助 著	『基本倫理：中等教育』	文海堂	1901
渡辺竜聖, 中島半次郎 著	『倫理学教科書』	目黒書店[ほか]	1902
元良勇次郎 述	『元良氏倫理書：中等教育 上』	成美堂	1902
元良勇次郎 述	『元良氏倫理書：中等教育 下』	成美堂	1902
井上哲次郎, 大島義修 著	『中学修身教科書 倫理篇』	文学社	1903
市川源三 著	『修身倫理図説：中等教科』	林盛林堂	1905

上記の表3内において、井上哲次郎と高山林次郎(高山樗牛の本名)による『倫理教科書』全5巻は、注目に値する。というのも、そこには日本主義に基づいた倫理教科書編纂の意図が明確に表明されているからである。著者の哲次郎は、『新編倫理教科書 巻1』の冒頭において、以下のように述べている。

我邦は自ら我邦に固有なる倫理ありて存する所以を以て他国の倫理教科書を邦語に訳出して、直に之を我邦に用ひんとすれば、忽ち其適当ならざるもの多きを発見せん、是に用ふべき倫理教科書は我邦の事情を酌量して結選したるものならざるべからず。然れども古代の倫理説の如きは最早今日に適用せず、我邦今日の状態は大に昔日に異なるものありて、倫理を実行する方法上にも亦幾多の変更なしとせざればなり。是故に今日用ふべき倫理教科書は今日の事情を参考して作為したるものならざるべからず。

このように当該書は、「我邦の事情」と「今日の事情」を考慮した倫理教科書として編纂されたという。ただし、ここでの問題意識は決して教科書編纂だけを意味してはいない。江島頭一によると、『新編倫理教科書』は哲次郎の手による『勅語衍義』(明治24年)の補完的な著述として位置づけられる書籍であるという。『勅語衍義』とは、哲次郎が教育勅語に対して解釈を加えた著作で



あるが、そこでは「孝悌忠信」「共同愛国」を中心としながら叙述がなされている点に特徴がある。この『勅語衍義』を下敷きにしながら『新編倫理教科書』では、「孝悌忠信」「共同愛国」を「道德の標準」とした上で、日本全体での「国民的道德」を確立し、民心の結合を主張する内容が記されている、と江島顕一は指摘している<sup>19)</sup>。ただし、『新編倫理教科書』には、『勅語衍義』にはうかがい得ない論調の変化や新たな言説も登場していた。それは、欧米諸国を意識した上で、日本特有の国体に基づく固有の道德として忠孝道德を強調している部分である。哲次郎によると、皇室に対する忠孝道德こそが日本に連綿と継承されてきた他国には無い固有の道德であり、それを基盤に日本は国家統合を成し遂げるべきとの主張がなされている。このような目的のもと刊行されることとなった『新編倫理教科書』全5巻は、「『勅語衍義』をより实际的に学校教育に適應するように作成されたものであり」、日清戦争後の急激な社会変化の中において「日本国民としての自覚と認識を促すべく我が国固有の国体や道德などの独自性というものを押し出す特色」を兼ね備えた書籍であった<sup>20)</sup>。

教育勅語を意識した教科書は『新編倫理教科書』以外にも存在する。表3内では、秋山四郎『中学倫理書』上・中・下や市川源三『修身倫理図：中等教科』などが、書籍冒頭部分に教育勅語を掲げている。両書ともに教育勅語の精神を基盤に、日本的な「倫理」なるものが叙述されていくのであった。

ただし、表3に掲載した倫理教科書がすべて『新編倫理教科書』のような目的や問題意識を有して編纂された訳ではないことは付記しておく。たとえば、渡辺竜聖・中島半次郎『倫理学教科書』は、「師範学校四年生、及び中学校五年生に向ひ、倫理学の大意を授くる時の教科書」<sup>21)</sup>を目的として編纂されたものであるが、教育勅語や日本に関する記述は無い。ただし、このような教科書はその後、徐々に編纂されなくなってゆく。その決定打となったのが、明治34年の中学校令施行規則の改正公布である。これによって「倫理科」とされていた科目は、「修身科」へと改称されることとなり、中学校では倫理ではなく修身が教授されていくこととなった。「修身科」への科目転換は、当然のことながら、西洋倫理学の教授を忌避していく傾向を生み出していく。中学校「修身科」で求められたのは日本固有の倫理、つまり「日本倫理」であった。

### Ⅲ. 「倫理書籍」にみる「日本倫理」論

本章では、日本固有の「倫理」を語ることのできる学問分野として発案された「日本倫理(学)史」に着目する。明治20年代半ばになると、国家主義的傾向が日本社会を覆っていくのは多くの論者が指摘するところであるが、倫理学においてその風潮は、「日本倫理」という言説を以って表面化していく。果たして「日本倫理」とは一体何であり、どのような方法によって語られたのであろうか。以下では、明治期の「倫理書籍」の中から「日本倫理」を冠している書籍に焦点を当てて、そこで

の内実と語りの方法を明らかにしていく。

## 1. 井上円了の「日本倫理学」

井上哲次郎の『倫理新説』は、倫理学のメタ定義を企図した書物として日本の倫理学史上、極めて大きな意味を持つことは子安宣邦が指摘している通りである<sup>22)</sup>。ただし、その後、「日本倫理学」なる学問的立場を表明し、そこでの学問内容を提示した先駆けとして、井上円了を無視することはできない。円了は、理論的には普遍的倫理を設定しておきながら、実際の運用場面においては、西洋には西洋の、日本には日本の倫理が存在するという論法によって「日本倫理」を主張した先駆者ともいえる存在だからである。

円了が刊行した「日本倫理」に関する書籍のなかで、最も早いものとしては『日本倫理学案』（哲学館、1893）である。そこでの目次は、以下のようになっている。

### 『日本倫理学案』 目次

勅語略解

第一講 緒論

第二講 实际的倫理論

第三講 日本國牀論

第四講 個人的道德論第一

第五講 個人的道德論第二

第六講 國家的道德論第一

第七講 國家的道德論第二

第八講 賞罰並教育論

第九講 結論

目次には無いが、実際には当該書籍冒頭に教育勅語全文が掲げられている。その後に、「勅語略解」（＝教育勅語一文一文に対する著者・円了の解説）が続いている。このような構成は如何なることを意識してのことであろうか。円了の意図が記されている当該書籍の序言部分を下記に略述する。

著者の円了によると、「近来倫理の書続々と世に出つるも皆西洋倫理の訳述にして未だ日本倫理の著述あるを見」ないのが現状である。そのような中、明治23年10月に「教育の聖諭」（＝教育勅語）が示されたが、この勅語を倫理学の立場から講じたものは未だ刊行されていない。円了が考えるに、この状況とは「我邦未だ自国の倫理書を有せずと謂はざるへからず」という状況である。そこで円了は、「日本一種の倫理学を組織せんことを期し」て、「哲学館倫理科」での講義科目の中に講義を設置し、そこでの講述内容を刊行するに至ったのが『日本倫理学案』である。なお本書は、哲学館（現在の東洋大学）で教授されている倫理学の立場を公にするという目的、日本において日本倫理学を講究する必要性を知らしめるという目的、という2つの目的も兼ね備えていると

いう。なお、もともと本書は、「学理上我邦の人倫を論述」することを企図したものであるが、その精神は教育勅語に基づいた「国体主義」でもあるため、本書の「巻書に謹て勅語の略解を掲げ」た、と述べている<sup>23)</sup>。

このように、序言部分において『日本倫理学案』の刊行経緯、著者円了の問題関心や立場が明確に述べられている。その後は、上述した目次の順序で論述が展開されるが、円了が構想する「日本倫理学」は、極めて素朴な国家主義を基盤に成り立っており、それは「第九講 結論」に端的に表れている。

円了によると「道德の原理は古今萬國に通して一定せるもの」というように、普遍的な「道德の原理」を想定しつつも、一方で「実際に応用するに当りては国々各多少其道德を異にせざるへからず」と主張する。つまり、現実世界において「道德の原理」を適用しようとする際には国を単位とした「道德」が生じるというのである。これをもとに「我邦には我邦一種の道德あり他国には他国特有の道德あり」という、国家を単位とした道德論を主張する。長文となるが、結論において述べられている円了の国家主義的な倫理構想を引用しておきたい。

今我邦の道德を考ふるに忠孝一致を以て人倫の基本とするなり而して忠孝一致は君民一家の国風より起る是れ我国体の一種他国と異なる所以又其国体の数千来継続せる所以なり此倫理の大綱分れて個人的国家的の二種となり個人的にありては孝を以て基とし国家的にありては忠を以て本とするもの亦我邦一種特有の道德なり故に我邦にありては忠と孝とは経となり緯となり以て一種特有の国体を組織するに至る之を内にして社会の安寧を保全するにも之を外にして国家の独立を維持するにも此経緯によらざるなし而して其経緯に貫通する一種の精神ありて人倫之れによりて定まり国体之れによりて安し之を日本魂と云ふ実に国民の元気なり我人は此元気と彼の経緯とによりて一人並一国の福德を完全ならしめ理想的卓美の国体を円満ならしむることを目的とすへし

このように円了による「日本倫理学」とは、個人(日本国民一人ひとり)と国家が一体となることを「忠孝」観念によって理論化していくための学問として構想されていたのである。国家と倫理を密接に関連づけて語ろうとする姿勢は、井上哲次郎をはじめとして、当時の多くの論者にも見られた姿勢である。円了は、天皇および皇室を日本の中核に位置づけた上で、天皇によって示された教育勅語こそが「日本倫理」の根底を形成するものと語るのであった。筆者が考えるに、円了による『日本倫理学案』の新しさは、天皇、皇室という観念と倫理を結びつけることによって、「日本倫理」を理論的に語り得るということを主張した点にある。つまり、「日本倫理」を語る際に天皇が根拠となり得ることを論理的に主張したのである。ただし、そのような論法は、同時に「日本倫理」を歴史へと誘っていく。なぜなら、当時の天皇とは「万世一系の天皇」、「皇統」というように、歴史によって正当性を担保された存在として表象されていたからである。よって、「日本倫理」を天皇に基づいて

語ろうとすれば、それは「万世一系」や「皇統」といった歴史性を帯びた概念とともに「日本倫理」を語らざるを得なくなる。従って、日本固有の倫理学を天皇に基づいて語ろうとした場合、理論的手法以上に歴史的手法が重視されるのは必然であった。先の引用文内において、「数千年来」という表現を円了が用いたことからそれは明らかである。「日本倫理」は、自身の固有性を求めて天皇と結合した結果、新たに歴史的な概念と結びつかざるを得なくなったのである。

## 2. 「日本倫理(学)史」という語り方

大日本帝国憲法第一条においては、日本を統治するのは「万世一系ノ天皇」とされているが、その天皇は歴史性を帯びた存在としても想定されている。ゆえに、「日本倫理」の根拠を天皇に求めようとするれば、必然的に「日本倫理」も歴史性を帯びることとなる。そこで本節では、「日本倫理」を語る際には如何なる歴史を以って語ったのかという点に焦点を当てていくこととする。

表4においては、明治期の「倫理書籍」のなかで、歴史的手法を用いて「日本倫理」を叙述している書籍を一覧化した。

表4 歴史叙述の方法を用いた「日本倫理」書籍

編著名	書名	出版	刊行年
① 湯本武比古・石川岩吉編	『日本倫理史稿』	開発社	1901
② 高賀詠三郎	『日本倫理史略』	目黒書店	1903
③ 有馬祐政	『日本倫理学史』	早稲田大学出版部	1904
④ 大江文城	『日本倫理学史』	開発社	1906
⑤ 足立栗園	『日本倫理史綱』	大日本図書	1908
⑥ 湯本武比古・石川岩吉編	『日本倫理史要』	開発社	1908

本文末には、資料1として上記6冊の書籍の目次を掲載している。長大で見にくい資料となっていたが、本節にとっては不可欠の資料であるのでお許し願いたい(なお、①と⑥は編者が同一であり、①をもとに増補改訂されたものが⑥であるが、後半部分の内容が異なるため別々の書籍として取り扱っている)。

6冊の書籍目次を通覧・比較すると、大きく3つに分けられることに気づくだろう。その3つとは、「儒学史的叙述」(④、⑤)、「日本史的叙述」(①、②、⑥)、「考証学的叙述」(③)である。以下では、これら3つについてそれぞれ論じていくこととする。

最初は、「儒学史的叙述」についてである。④、⑤の著者である大江と足立は共に、漢学者・儒学者として名を馳せた人物である。目次を見ても分かるように、両書ともに朱子学(者)の系譜を「日本倫理学史」として叙述している。先に触れた河村重秀編『倫理略説』に通じた内容であることは容易に想像できるだろう。つまり、④、⑤は江戸期以来の伝統を強く継承しながら「日本倫理」の歴史叙述を試みているのである。例えば、大江は自著の目的を以下のように述べている。

## ④『日本倫理学史』

余は今我か、倫理学史を編述せんとして、筆を藤原惺窩に起し、藤田東湖に終ふ。其書中人の亦殆んど儒家に属せり。然らば則ち此書題して本邦儒学史と称すべくして、倫理学史なりといふの、甚だ不通の言たるを免れず。されど当時、儒家以外殆ど倫理を説くものなく、倫理は全く儒家が専攻に委せられたり。儒家はまったく当時の思想会の先導者となり、又以つて当時の国民的精神の一半を代表せるものといふべし。<sup>24)</sup>

また、足立も同じように

## ⑤『日本倫理史綱』

日本倫理の一斑を知らんと欲せば、吾人は先づ東洋倫理に特に儒教の梗概を知るを要す、儒教は実に日本国民をして宗教以外に立ちて人倫道德の要旨を知了し、以て我が国家社会の今日あるを致さしめたるものなり、<sup>25)</sup>

と述べている。ここから両者ともに、「日本倫理」は歴史的に儒学(者)の専有であったという認識に立っていることが推察される。「倫理」が儒学(者)の専有であったのかどうかは意見が別れるであろうが、ethicsという語が「倫理」として訳出される際に、儒教經典の語が用いられたことは佐佐木が指摘している通りである<sup>26)</sup>。その意味で「倫理」という語は儒学(者)の専有といえるかも知れない。ただし、「日本倫理」を儒学(者)のみから導出する方法は、他の「倫理書籍」を通覧しても限られた書籍のみに用いられていたことから、当時の日本社会においては多くの支持を集めた方法では無かったであろうと筆者は考えている。

次は、「日本史的叙述」について触れる。著・編者の湯本、石川および有馬は官職を得ていたという点において共通点を持つ(湯本と有馬は文部省勤務経験者、石川は皇子傳育官や高松宮付別当などを経て宮内省御用掛等を歴任)。その点を考慮した上で、下記、序文からの引用文を読み解いてもらいたい。

## ①『日本倫理史稿』

三千年来国民思想が、或は政治上の変動に伴ひ、或は外来思想の影響を蒙りて、適応の発達進歩を遂げ、以て今日に至れる、その由来の研究は将来の政治のため、又教育のために頗重要なるや論なし。殊に倫理上の研究の如きは、国民文明の性質を了解するに必須なるなり。然るに本邦古来の著書、未これを系統的に叙述したるものなきは、吾人の深く遺憾とせし所、及自、揣らずして本稿を起したる所以なり。<sup>27)</sup>

## ③『日本倫理学史』

本論に入るに先立ち、本邦古来の倫理思想に大関係がありました神道を始め、儒道、仏

教の発端を記述して、それがいかに早くより其の根底を為し又其の潤澤を為してゐたかを示し、尚ついでに道教及び基督教の流伝についてもいさゝかなれど紹介いたして、往古より日本には諸種の思想の存在をしてをつたことを証しませう。<sup>28)</sup>

両書に共通しているのが、特定の宗教や立場に偏依せずに「日本倫理」を語るという姿勢である(⑥は①と同じ立場)。なお、①、③、⑥において共有されている「日本倫理」史の認識とは、日本の歴史過程において、「日本倫理」なるものは外来思想との接触を経て種々の影響を受けながら現在に至っている、という認識であった。先ほど紹介した「儒学史的叙述」とは、この点において大きく異なっている。また、「日本史」という歴史を「日本倫理」を語る際の外的枠組として設定しているのも特徴と言えよう。言い換えれば、「日本史」という枠組の中で「日本倫理」の歴史を叙述しようと試みるのが「日本史的叙述」の方法なのであった。ここでいう「日本史」とは、「万世一系の天皇」に統治されてきた日本という国家史を意味している(ここでの国家史が実証的な意味において実体であったかどうかは関係ない)。極めて理念的ともいえるこの国家史の中で如何なる「日本倫理」が歴史的に展開されてきたのか、という視点から「日本倫理」を叙述しようとするのが「日本史的叙述」の方法なのである。つまり、彼らにとっては「日本史」という歴史が理解枠組みの前提として存在し、その歴史の上で起こる「倫理」なるものは全て「日本倫理」として叙述可能と想定されているのである。ゆえに、外来の仏教や儒学、その他の思想・宗教がどんなに日本に入ってくようと、それが「日本史」の上で生じた現象である以上、全ては「日本倫理」として叙述可能となる。官吏経験者である3人にとってみれば、特定の思想や立場のみを支持することよりも、それらを包括しながら「日本倫理」を構築していく方法(「日本史的叙述」)を採用することは、国家を前提とする官吏としては当然の選択であったと推察される。

最後に、「考証学的叙述」について述べていく。⑤は一見すると「日本史的叙述」に準じているように見える。「日本倫理」に関する歴史認識については、確かに「日本史的叙述」と同じと言えなくも無いが、実は、叙述の目的が大きく異なる。著者の高賀によると

#### ⑤『日本倫理史略』

我が邦上古ノ倫理ハ唯、一ノ神道アルノミテ止マリシカ他国ノ教法入り来ルニ及ヒテ或ハ化合セシモノアリ或ハ混合セシモノアリ或ハ拒否シテ相容レザリシモノアリ而シテ皆邦人ノ脳裏ニ浸染シ漸漬積累ノ極今日倫理界ノ現象ヲ呈セルハ即チ是ナリ<sup>29)</sup>

というように、日本古代の倫理は「神道」のみであったが、歴史が下るにつれて様々な思想・宗教と接触(「化合」「混合」「拒否」)して本来の倫理とは異なる様相を呈するようになってしまった。ゆえに、その接触を歴史的に遡及しながら明らかにしてゆき、古代日本にもともと存在していた「固有ノ倫理」を追求するという関心と方法を高賀は表明しているのである。古代日本に「固有ノ倫理」

を想定するという意味においては一種の理想主義と言えるが、それを論証する方法として考証学（高賀によると「真誠ノ推理法」<sup>30)</sup>）の手法を用いている点は興味深い。周知の通り、考証学はもとと清朝下の儒教經典研究において隆盛した学問方法であり、江戸期の朱子学に大きな影響を与えた。考証学的な発想にもとづき、加上説の立場から批判的な仏典研究を行い、大乘非仏説を主張した富永仲基(1715-1746)はあまりに有名である。高賀は、富永と同じ方法を用いて「固有ノ倫理」を追求しようと主張するのであった。高賀にとって、儒教や仏教に影響され変質してしまった「固有ノ倫理」は間違った倫理であり、純粋な「固有ノ倫理」こそが「日本倫理」なのである。その意味で、国学者の系譜に高賀を位置づけることも可能であろう。

## おわりに

本稿では、明治期の「倫理書籍」に焦点を当て、出版動向を明らかにするとともに、明治20年代から30年代にかけて新しく語られるようになった「日本倫理」を対象に、その内実と語りの方法について論じてきた。多くの学問にいえることであろうが、教育勅語の存在は、倫理学にとっても非常に大きかった。「日本倫理」を語る際に、教育勅語は極めて大きな位置づけがなされ、多大な影響を与えることとなった。なお、「日本倫理」に対する教育勅語の影響はすでに他の論稿でも指摘されていることではある<sup>31)</sup>。しかし、天皇を根拠に「日本倫理」が語られることによって、同時に「日本倫理」が歴史性を帯びざるを得ないという指摘は、本稿独自のものと言える。この指摘を起点に、本稿Ⅲ-2においては、「日本倫理(学)史」を論じている書籍を取り上げ、そこでの語り方を分析した結果、「儒学史的叙述」、「日本史的叙述」、「考証学的叙述」の3類型があることを明らかにした。

最後に課題を述べておく。本稿で作成した書誌情報リストは、先述したように国会図書館デジタルコレクション(調査着手時は近代デジタルライブラリー)に格納されているデータを基盤にして作成されたものである。ゆえに、近代日本における「倫理書籍」の全てを網羅したものではない。また、倫理・倫理学の語を書名・目次に含まなくとも、倫理・倫理学に関連する内容を持つ書籍は存在するであろう。以上のことから、本調査において作成したリストが、明治期の「倫理書籍」の全体に対し、どこまで妥当性を有するかは本稿において検証できていない。この課題に対してはリストを充実させていく以外、それを確かめる術は無いため今後も継続してリストの充実作業を進めてゆきたいと考えている。ただし、冒頭にも述べたように、日本における倫理学の歴史研究が未だ発展途上であることを考慮すると、本稿にも一定程度の学術的意義は見出すことは可能と筆者は考えている。前稿および本稿を踏まえて、より実のある成果を世に問うていくことを約して擱筆することとする。

(本稿は、公益財団法人上廣倫理財団平成27年度研究助成「近代日本の倫理学に関する大学制度と出版実態の歴史的研究」[課題番号:B-055, 個人研究, 代表:江島尚俊]における成果の一部であることを付記しておく。)

## 資料 1

## ①湯本武比古・石川岩吉編：日本倫理史稿，開発社，1901

緒論	1
第一編 上古史 固有思想期	5
序説 民族の性情と境遇との關係を論ず	5
第一章 日本民族の性情における風土の影響	8
第二章 日本民族の性情における國家及び社會の組織の影響	15
第三章 日本民族の倫理思想	25
第四章 日本倫理の特色	35
第五章 上古の教育	56
第六章 儒教の伝来	81
第二編 中古史の上 仏教伝初期	85
第一章 仏教の伝来	88
第二章 崇仏党の勝利	91
第三章 仏教興隆と聖徳太子	95
第四章 外来思想の性質及びその影響	103
第五章 神儒仏三教の地位	128
第六章 積弊革新の機運	136
第三編 中古史の中 思想混淆期	149
第一章 大化改新と支那思想	150
第二章 平城時代の社會の狀態	160
第三章 支那風の教育	174
第四章 歴朝の仏教保護	180
第五章 過渡時代思想界における外来思想の影響及びその調和	188
第六章 新舊思想の衝突	223
第四編 中古史の下 仏教思想流行期	231
第一章 門閥政治	231
第二章 当代の儒學及び學風の弊	264
第三章 仏教思想の普及とその影響	279
第四章 陰陽五行説の流行	317
第五章 平安城裡の腐敗	322
第六章 武門の興隆平氏の専横	346
第七章 結論	350
第五編 近古史の上 武士道興隆期	353
武士道期總論	353
第一章 武門の起源及び勢力	355
第二章 武士道の發達	382
第三章 武士道の特色	415
第四章 結論	450
第六編 近古史の中 武士道鍛鍊期	453
第一章 北条氏、足利氏の滅亡	453
第二章 戦國武士の教育	505
第七編 近古史の下 武士道成熟期	589

第一章 徳川家康の文教奨励	592
第二章 教育	597
第三章 學問の發達	634
第四章 政治上及び社會上に於ける學問の效果	717
第五章 社會風俗の変遷	766
第六章 幕府の滅亡、王政復古	802
第八編 現代史 泰西思想浸潤期	823
第一章 一新の政治	825
第二章 新改に抗したる二思想	875
第三章 倫理界の混乱	899
結論	925

## ②高賀誼三郎：日本倫理史略，目黒書店，1903

第一章 固有ノ倫理	
第一節 神ニ於ケル思想	1
第二節 神ニ事フル方法	3
第三節 心性上ノ分析	4
第四節 君臣ノ状	5
第五節 君臣特殊ノ關係	6
第六節 父子ノ状	7
第七節 夫婦ノ状	8
第八節 兄弟朋友ノ状	10
第九節 終結	11
第二章 儒教ノ倫理	
第十節 固有倫理ト儒教トノ異同	12
第十一節 我邦ト支那トノ風習ノ異同	13
第十二節 神道儒教共ニ祭祀ヲ重ス	14
第十三節 祭祀ノ種類相似タリ	15
第十四節 一夫多妻ノ俗相似タリ	16
第十五節 儒教ハ感情ヲ高雅ナラシム	16
第十六節 同教化ヲ上進ス	16
第十七節 同倫理思想ヲ精密ニス	17
第十八節 同繼嗣ノ法ヲ立ツルニ功アリ	17
第十九節 同内外ノ別ヲ正スニ益アリ	18
第二十節 同近婚ヲ減スルニ力アリ	19
第二十一節 儒教ニハ君主ト上天トヲ比スルコトアリ	19
第二十二節 同徳アルモノハ王タリノ訓アリ	20
第二十三節 同國民的倫理ヲ減セントスル弊アリ	21
第三章 仏教ノ倫理	
第二十四節 仏教ノ性質ト神道トノ異同	23
第二十五節 仏教ハ世界ニ於ケル推理ヲ長ス	24
第二十六節 同神ニ依ル卑弱ノ情ヲ去ル	25
第二十七節 同慈仁ノ風ヲ長ス	25



第二十八節	同親族ノ交ヲ厚クス	25
第二十九節	同卑陋ノ俗ヲ易フ	26
第三十節	同地方ノ福利ヲ進ム	26
第三十一節	本地垂迹説ノ弊アリ	26
第三十二節	日常ノ義務ヲ輕スル弊アリ	28
第三十三節	葬祭ノ古俗ヲ易ヘタリ	30
第三十四節	儒道ト仏教トノ関係	31
第三十五節	仏教ハ儒道ノ欠ヲ補ヘリ	33
第三十六節	宋學流行時代ノ仏教ノ状	34
第四章	武士道	
第三十七節	武士道成立ノ事情	25
第三十八節	武士道ハ氏族ヲ尚フ	26
第三十九節	同恥ヲ重シ死ヲ輕ズ	27
第四十節	同勇ヲ尚ヒ武ニ精シ	28
第四十一節	同信義ヲ重ス	39
第四十二節	同質素ヲ守ル	39
第四十三節	同不動心ヲ尚フ	40
第四十四節	同風雅ヲ尚フ	41
第四十五節	武士道ヲ奨メシ人々	42
第四十六節	武士道流行時代ノ敬神ノ状	42
第四十七節	同神道及其ノ弊	43
第四十八節	同代ノ敬神家	44
第四十九節	前代ノ仏教	44
第五十節	武士道流行時代ノ仏教流行ノ事情	46
第五十一節	同仏教ノ各派	47
第五十二節	高僧ノ護王之行為	49
第五十三節	儒學ハ武士道ノ原理ヲ説明シタレ モ太タ粗漏ナリ	50
第五章	哲學	
第五十四節	道理	51
第五十五節	道理ノ種類	52
第五十六節	倫理ニ普通特種ノ二アリ	53
第五十七節	良心ノ起源發達	54
第五十八節	人類ト倫理トノ関係	55
第五十九節	歐洲人倫理ノ主眼	56
第六十節	支那人倫理ノ主眼	58
第六十一節	本邦人倫理ノ主眼	59
第六十二節	結論	60

## ③有馬祐政：日本倫理学史，早稲田大学出版部，1904

緒論	1
總説	1
第一章 神道の發端	5
第二章 儒道の發端	10
第三章 仏教の發端	15
附説(一) 道教	19

附説(二)	基督教	31
本論		39
第一章	上古時代の倫理思想	39
第二章	王朝時代の倫理思想	47
第三章	鎌倉時代の倫理思想	57
第四章	南北朝時代の倫理思想	64
第五章	室町時代の倫理思想	72
第六章	江戸時代の倫理思想	73
第七章	程朱學派	95
第八章	陽明學派	151
第九章	復古學派	191
第十章	心學派	235
第十一章	神道派	265
結論		287

## ④大江文城：日本倫理学史，開發社，1906

總論	1
第一編 程朱學派	39
第一章 藤原惺窩	52
第二章 林羅山	72
第三章 室鳩巢	89
第四章 雨森芳洲	108
第五章 山崎闇斎	121
第六章 佐藤直方	141
第七章 浅見綱斉	151
第八章 三宅尚斉	170
第二編 陽明學派	191
第一章 中江藤樹	196
第二章 熊沢蕃山	230
第三章 三輪執斉	251
第四章 佐藤一斉	266
第五章 大監中斉	288
第三編 古學派	319
第一章 山鹿素行	327
第二章 伊藤仁斉	367
第三章 伊藤東涯	391
第四章 貝原益軒	406
第五章 荻生徂徠	430
第六章 太宰春台	455
第四編 獨立學派	479
第一章 三浦梅園	481
第二章 二宮尊徳	512
第五編 折衷考證學派	535
第一章 片山兼山	538
第二章 井上金峨	555

第三章	皆川淇園	564
第四章	太田錦城	581
第五章	広瀬淡窓	599
第六編	水戸學派	621
第一章	會沢正志	628
第二章	藤田東湖	654
結論		

## ⑤足立栗園：日本倫理史綱，大日本図書，1908

概論		1
第一篇	朱子學	23
第一章	藤原惺窩	23
第二章	林羅山	30
第三章	山崎闇斎	38
第四章	貝原益軒	49
第五章	室鳩巢	60
第六章	朱子學の系統	69
第二篇	陽明學	73
第一章	中江藤樹	73
第二章	熊沢蕃山	80
第三章	三輪執斉	87
第四章	大塩中齋	93
第五章	陽明學の系統	100
第三篇	復古學	103
第一章	伊藤仁斉	103
第二章	伊藤東涯	113
第三章	山鹿素行	118
第四章	荻生徂徠	127
第五章	太宰春台	135
第六章	復古學の系統	141
第四篇	折衷學	
第一章	井上金峨	143
第二章	皆川淇園	150
第三章	太田錦城	153
第四章	折衷學の系統	159
附録	近世の倫理學書	161
第一章	朱子學者	161
第二章	陽明學者	174
第三章	復古學者	189
第四章	折衷學者	185
第五章	爾余の諸學者	190
別録	引用原文	
並に参考要句		

## ⑥湯本武比古・石川岩吉編：日本倫理史要，開發社，1909

第一篇	上古史 固有思想期	1
第一章	民族固有の性情及び理想	2
第二章	建國の由来 國体	35
第三章	國体と倫理	42
第四章	外國文明の伝来	58
第二篇	中古史の上 外教伝播期	61
第一章	仏教の伝来及び漢學の興隆	61
第二章	外来思想の最初の影響	69
第三章	蘇我氏の専横	77
第四章	大化改新の精神	82
第五章	外来思想の浸潤	92
第六章	新舊思想の消長	110
第三篇	中古史の下 仏教中心期	127
第一章	平安奠都後の氣運	128
第二章	文藝の興隆	136
第三章	風俗の華美	142
第四章	門閥政治	146
第五章	吉凶禍福に対する関心	154
第六章	爛熟時代の思想	181
第七章	節制の弛廢	193
第四篇	近古史の上 武士道興隆期	200
第一章	武門の興隆	200
第二章	武士道の淵源	210
第三章	武士道の特質	221
第四章	武士の自覚	265
第五篇	近古史の中 武士道鍛練期	274
第一章	名教の頽廢	274
第二章	武士の鍛練	301
第三章	当代武士道の特色	325
第四章	皇室の式微，諸將の尊王	367
第六篇	近古史の下 武士道大成期	373
第一章	文教の奨励	373
第二章	儒學の振興及びその影響	388
第三章	古典の研究及びその影響	449
第四章	心學及び報徳教	530
第五章	幕府の衰亡	542
第七篇	現代史 西洋思想摂取期	578
第一章	維新	578
第二章	西洋文明の摂取	598
第三章	改革の影響	608
第四章	自覚の喚起	614
第五章	日清戦役後の発展	623
第六章	余論	633

〈注〉

- 1) 詳細については、江島尚俊：近代日本の大学制度と倫理学—東京大学における教育課程に着目して—，田園調布学園大学紀要，10：pp.137-157，2015．を参照．
- 2) 同論文：pp.137-138．
- 3) 国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/>
- 4) 国会図書館での収蔵書籍が当時の「倫理書籍」の全体で無いことは、筆者も熟知している。ただし、本稿が近代日本の「倫理書籍」について歴史的に探求していこうとする先駆的な研究であり個人での研究であることを留意願いたい。
- 5) 書誌情報リスト上では、明治期刊行は328冊であったが、精査したところ、その内の7冊が重複書籍であることが判明した。それらは今回の調査対象からは削除している。ただし、同名・同執筆による書籍であっても、出版年や版数が異なる場合はリスト内に残している。
- 6) グラフ内の数字は、その年における刊行冊数を意味している。
- 7) 河村重秀編：明倫撮要，福山学校，1871．
- 8) 同書，19丁裏．なお、引用文内「六論衍義大意」とは、江戸幕府八代將軍徳川吉宗が荻生徂徠に命じて原書を作成、それに室鳩巢が注解をつけて刊行した書物を指す。この書物の淵源は、明代・洪武帝が農民教化を目的として朱子学を基盤に布告した「六論」に遡り、清代ではそれを『六論衍義』として継承している。これが、琉球を通じて江戸時代の日本に紹介された。
- 9) 前田勉：明治前期の「学制」と会読，愛知教育大学研究報告人文・社会科学編，61：p.23，2012．
- 10) ここでの「東洋」には、その語以外にも「支那」や「孔子」，「春秋」の語が含まれた書籍も分類している。
- 11) 「複合」とは日本・東洋・西洋などの語が複合して書名に組み込まれている場合の分類に用いている（例：『東洋西洋倫理史』など）。
- 12) 「宗教」とは、書名に「宗教」という語が組み込まれている場合や仏教とキリスト教という2つの宗教名が含まれている場合に分類した。（例：『倫理と宗教』など）。なお、「宗教」という語の場合、当該書籍の内容は付度せずに単純に書名の表記のみで分類を行っている。
- 13) 表1で設定した分類は排他的分類ではないため、1冊の書籍であっても各分類に該当する場合は、それぞれの分類に加算計上している。（例：トルストイ著『倫理と宗教』は、1冊の書籍であるが、「訳書」と「宗教」にそれぞれ1ずつ計上）複数分類に該当する書籍は、3冊存在した。
- 14) 明治期における倫理学の受容に関しては、熊田健二：明治期倫理思想の一考察—井上円了の倫理学説とその問題点—，思想と文化，1986．行安茂：明治倫理学の展開—英米倫理学の受容とその批判—，研究集録（岡山大学），95，1994．西悠哉：「ethics」概念の受容と展開—倫理教科書を中心として—，佛教大学大学院紀要文学研究科篇，38，2010．などを参照．
- 15) 文部省編：学制百年史，帝国地方行政学会，p.270，1972．
- 16) 中原貞七：倫理書—中等教育—，文学社：pp.1-3，1893．
- 17) 米田俊彦：近代日本中学校制度の確立—法制・教育機能・支持基盤の形成—，東京大学出版会，1992．第1部第3章を参照．
- 18) 井上円了：中等倫理書，1巻，集英堂：p.2，1898．

この細目の主旨には「倫理科は教育勅語の聖旨を遵奉し諸学科の中樞として人倫道德の要旨を講し将来中等以上の社会に立つべき者の心得を明にし実践躬行を觀奨するものとす」とある。なお、注意として「倫理科は可成別に講堂或は教室を設けて教授し之に入る者をして自ら感動せしむる様裝飾具備することを要す」と

あるように、単なる知識教授を企図した科目では無かったことがうかがわれる。

- 19) 江島顕一：明治期における井上哲次郎の「国民道徳論」の形成過程に関する一考察—『勅語衍義』を中心として—，慶應義塾大学大学院社会学研究科，67：pp.19-20，2009.
- 20) 同論文：p.20.
- 21) 渡辺竜聖・中島半次郎：倫理学教科書，目黒書店[ほか]：p.1，1902.
- 22) 子安宣邦：第四章 翻訳語としての近代漢語—「倫理」概念の成立とその行方—，漢字論—不可避の他者—，岩波書店，2003.
- 23) 井上円了：日本倫理学案：p.1，1893.
- 24) 大江文城：日本倫理学史，開発社：pp.2-3，1906.
- 25) 足立栗園：日本倫理史綱，大日本図書：pp.1，1908.
- 26) 佐佐木英夫：倫理と云ふ文字の歴史的研究，日本大学文学部研究年報，1(復刊号)，1951.
- 27) 湯本武比古・石川岩吉編：日本倫理史稿，開発社：pp.1，1901.
- 28) 有馬祐政述：日本倫理学史，早稲田大学出版部：pp.5，1904.
- 29) 高賀詠三郎：日本倫理史略，目黒書店：p.1，1903.
- 30) 同書：p.2
- 31) 雨宮久美：明治期の倫理的唱歌の成立—忘れられた教育勅語唱歌—，明治聖徳記念学会紀要，23，1998.  
三宅守常：三条教則と教育勅語—宗教者の世俗倫理へのアプローチ—，弘文堂，2015.などを参照.